近世寺院経営史の研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-11-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 洋平 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19731

2017 年 1 月 17 日

「博士学位請求論文」審査報告書

審査委員　（主査）　文学部教授

氏名　　落合　弘樹　　㊞

（副査）　商学部名誉教授

氏名　　圭室　文雄　　㊞

（副査）　文学部専任講師

氏名　　野尻　泰弘　I　　㊞

（副査）　日本大学法学部教授

氏名　　朴澤　直秀　　㊞

1　論文提出者　氏名　　田中　洋平

2　論文題名

（邦文題）近世寺院経営史の研究

（欧文訳）A study of history on temple management in early modern Japan

3　論文の構成

はじめに

第一章　　幕末維新期の蝦夷地における新寺建立―曹洞宗寺院を中心として―

第二章　　近世中後期の日蓮宗における信仰と寺院経営

第三章　　近世北関東農村における祈禱寺院経営

第四章　　近世農村地帯における修験寺院経営

―武州入間郡上寺山村林蔵院を中心として―

第五章　　近世北関東農村における寺院資産の管理

第六章　　僧侶養成と寺格からみる近世曹洞宗寺院

第七章　　近世中後期の武蔵国における新義真言宗寺院の無住化

付　論　　林蔵院の宗教活動

おわりに

4　論文の概要

第 1 章においては，蝦夷地における曹洞宗寺院の成立過程を論じている。近世中期に成立した寺院は，多くは葬祭檀家を持たない平僧寺院として設立されたが，幕末に至り人口が急増すると，法地寺院の設立が多くなり，葬祭可能な寺院と変わっていくことを指摘している。

第 2 章においては，日蓮宗不受不施派の拠点であった下総国平賀本土寺の史料を分析し，少数の檀家しか持てなかった寺院でも，熱心な檀家に支えられた寺院経営が可能であったことを明らかにしている。

第 3 章では，常陸国真壁郡黒子（関城町）千妙寺の史料を分析し，北関東の天台宗寺院，とりわけ祈祷寺院の経営を分析している。檀家数が少ないので檀徳収入は僅かであるが，持添地・年貢地を含む土地所有により，作徳収入がその経営基盤であったとしている。また，近世後期の関東農村における人口減少の結果，寺院の無住化が増加する一方，寺の存立のために村役人は住職の扶持米を用意したり，耕地の集積などを行ない，僧侶の定住化を図ったことも指摘している。

第 4 章では，武蔵国入間郡上寺山村（川越市）本山修験林蔵院の史料を分析している。この寺の経営は宗教活動によって得られる収入は 2 割程度であり，多くの収入は田畑からの小作料や祠堂金貸付による利息から得ていることを明らかにしている。

第 5 章では，常陸国真壁郡黒子村天台宗千妙寺の史料により，末寺の無住寺院の資産管理について検討している。そして，①資産管理については寺が無住のため村役人や檀家がおこない，②無住寺院の年貢負担を村民が持ち，伽藍の修復は寺の立ち木を売却し，その費用に当てられたが，③無住寺院の資産は村役人よりも田舎本寺である千妙寺が強い権限を持っていた点を明らかにした。

第 6 章では，上野国群馬郡子持村曹洞宗雙林寺の史料が分析されている。そして，①曹洞宗末寺の僧侶養成と寺格の関係を論じ，僧侶資格が充分ではない僧侶が宗判権を持つ法地寺院の住職にかなりの数でなっており，②上野国では多くの無住寺院がみられるが，とりわけ平僧地寺院の無住化が増加しているが，③信濃国では平僧地から法地寺院への昇格が 21 か寺あるものの，総数 550 か寺からすると 3.8%にとどまることなどを指摘している。

第 7 章では，武蔵国足立郡倉田村（桶川市）新義真言宗明星院の史料を分析し，埼玉県域で最も勢力が強く全宗派のうち 47.5%を占める新義真言宗の寺院を取り上げている。この宗派寺院の檀家数は極めて少なく，そのため収入も少ないうえ，寺格の低い門徒寺院が 84.6%を占め，無住寺院が急増しているが，生き残る方法として村鎮守の別当寺として暮らし向きを変える寺が多かったことなどを指摘している。

付論は第 4 章の補論的論文である。

5　論文の特質

本論文は近世中･後期の寺院の経営について詳しく論じており,これまでともすれば,寺院は葬祭を軸とした檀家制度のもとで安定的な経営をしていたとのみ考えられてきたが,従来の研究に対して祈祷寺院の研究の必要性を強調した点は高く評価できる。また,多くの図表を使いわかり易く説明している点も特筆に価する。

史料調査は北海道・群馬県・茨城県・千葉県・埼玉県・長野県・石川県と広範囲にわたり,積極的に行動したことがうかがえるが,それぞれの寺院において原史料に当たり,実証的に分析した成果にもとづく論文である。また仏教諸宗派に関しても，天台宗・真言宗・曹洞宗・日蓮宗・修験宗など多岐にわたって比較検討していることも，本論文の特質となっている。

6　論文の評価

本論文の成果は，第一に地域史研究と宗教史研究の架橋となる研究を目指した点である。澤博勝氏以来の研究の延長線上にあるが，特に寺院の資産管理問題などを村落の問題とあわせて考えようとした点にみるべきものがある。

第二に，従来の村落共同体論では，渡辺尚志氏の村の間接的土地所有のように，百姓と土地の問題に関心が集中したが，やはり宗教施設も村の一部なので，この点に言及した本論の成果は貴重である。

ただし，審査の過程においては，フィールドが東日本に偏り，得られた結論をたとえば真宗がさかんな地域や遍路寺の多い四国など，全国にあてはめることができるのかといった点や，第二章の対象となった下総国がとくに不受不施派の勢力が強かったという局地性があること。さらに分析が村落の寺院中心となった結果，本寺末寺の関係や中心寺院同士の角逐など，教団全体のありかたが後景になってしまったこと。地域史・村落史と宗教史の架橋を試みるものの，在地有力者による寺院経営のバックアップなど，地域全体の考察が不足しているなど，複数の疑問点や課題が示された。ただし，これらによって本論文の論旨や分析内容そのものが否定されるわけではなく，田中洋平氏の今後の研究に期待したい。

全体として，これまでの日本近世仏教史研究においては，葬祭を中心とした檀家制度を軸とする寺院のありかたを考える研究が多かったが,本論文は葬祭を軸としない寺院,つまり祈祷寺院の経営実態を追及した点において，意欲的かつ研究史のうえで有意義な論文であると評価する。

7　論文の判定

本学位請求論文は，本学学位規程の手続きに従い，審査委員全員による所定の審査及び試験に合格したので，博士（史学）の学位を授与するに値するものと判定する。

以　上